

新出の大澤家聞書

『大澤家聞書』は入木道に関する書籍目録である。『入木道傳書目録』（『日本書畫苑』第一所収）の七十一番目に見えている。これは入木道の伝授書の一つであるが、『大澤家聞書』の原本はもちろんのこと、伝本についてさえ、その存在が全く知られていなかったものである。『大澤家聞書』が、収載されているこの書籍目録は、わが国の書道に関する伝授目録百二十五個条と、世尊寺代々傳書四十七部と、灌頂傳授七個条をかかげているものであり、奥書に「寛政二年（一七九〇）晚秋政記之、源尹祥」とある。このちに源（森）尹祥（一七四〇〜一七九八）の子の公風が、伝授事之順を加えて巻末に公風の奥書がある。

これから翻刻しようとする『大澤家聞書』には源尹祥が自ら朱筆で「此一巻、大澤家ノ聞書也。大澤ハ持明院家ノ一門也。雖然、聞違不_レ少、依之補之。源尹祥」と奥書を加えており、また、『入木道傳書目録』の奥書と考え合わせると、この度の新出の『大澤家聞書』が『入木道傳書目録』収載の『大澤家聞書』の原本と考えてよいかと思う。

尹祥は繁勝の子で、繁利の孫であり、矩章の玄孫にあたる。字は源

細貝 宗弘

流。通称は傳衛門といった。幕府の役人として小普請・小十人などの職をつとめたが、天明元年（一七八二）四十二歳の時に致仕した。しかし致仕ののち、寛政元年（一七八九）五十歳の時、祖先以来の入木道を相伝した。また持明院中納言宗時の門下にいたので、幕府より旗本・御家人たちにも持明院家入木道を伝授するよう命ぜられた。ついで同四年には、將軍家の下命により藤原行成筆と伝える『和漢朗詠集』を模写するなど幕府の右筆をつとめた。

尹祥が家伝の書法をどのように伝授したかについては、持明院流の入木道の伝授に関する記録である自著の『書道訓』に見えており、それによると、

尹祥ごときは、書體は未熟極りなけれども、書道はしひて學び、又古に立歸り、宗時卿よりゆるされ、彼卿の命をうけて人々に傳授す、其赤心達しけるにや、今潔白の御代に生れ、御旗本御家人へ、家傳の入木道指南仕るべきの台命をかうぶる事、骨髓に徹し有がたく、先祖の眉目何幸か是にしかんや、

とあり、終始誠実をもって謙虚な態度で伝授に臨んだようである。

また尹祥は『入木道傳書目録』収載の書籍を復原模写をして再現させた次第については、この『入木道傳書目録』の相伝を受けた尹祥の子、公風の奥書によつて知ることができ、それによると、

父尹祥、若年の時より書道に志ふかく、故大納言基定卿より重章へ傳へたまふ祕書、享保寛保兩度の洪水に悉く亂れしを、曾祖父祖父は恐れて手をつくる事なく、年々其まゝ蟲を拂ひてはおさめをきしを、父尹祥、寶曆十三年のころより、あるにまかせて、すかしてはうつし、へぎては摸寫せしまゝ、次第もわかつたずうつしたり、又は藏書にもれし事は、高階經和基將卿門人、藏書を、其嫡經道より乞ゑて、數卷摸し、或松平等無軒今の主水守惇曾祖父也、此頃の面八尊世ざるは前也の書、大石喜庵より乞てうつし、其外不思議に感得の書もあり、集めみれば百卷あまりに成ぬるを、一二をつけてをきしに、前後相違甚しかり、

であつたという。また尹祥の自著『書道訓』にも同様の記述が見られる。それには、

其中享保十三酉(マ)年、寛保二戌年兩度の出水紙中に徹り、手を入るといへども、惡水故に次第に亂る、然るに尹祥幼年より

書を嗜み、朽果しをへがしては見、すかしては見、有台の料紙へ次第もなく寫し付、又は其すぢ目より乞求めて寫せし故に、本に大小有、紙に好惡有、

という。尹祥は入木道に関する秘伝書を粒粒辛苦の努力を重ねて、復原模写をして再現させ、秘笈深く藏していたようである。しかし、惜しいことにこれらの大半は散逸して伝存せず、数点の書籍が現存するだけである。

ここに新たに源尹祥自筆の『大澤家聞書』が出現したことは持明院家の書道の実態を解明する上に、大いに役立つものと考えられ、また貴重な資料となるものといえよう。

筆者はこの『大澤家聞書』を東京の古書肆で偶然眼にし、入手したので、ここに同書の概略を報告し、取りあえずその全文を翻刻しておくこととする。

同書は、縦は二七・三センチ、横は一五・五センチの袋綴の明朝綴となつてゐる。表紙は鳥の子の墨と藍との墨流し（一部に金泥で、墨流しにそつて水の流れを描いた箇所もある。）、表紙の左上に縦一八・四センチ、横三・五センチの水玉の題簽に、本紙と同筆の持明院流の行草体で「大澤家聞書」と墨書したものを押してある。巻頭一丁は白紙で表中央上部に「七師庵／收藏記」の長方形朱文の藏書印がある。第二丁表から始まり、墨付二十三丁（但し、第二十四丁裏は余白）。一面八行及び十一行書きが多く、九行書き、十二行書きもある。

細字は一面十六行書きである。朱の見せ消ち、朱線、朱の書き入れあるもすべて源尹祥の筆跡である。

翻刻の方針


一、本文は原本につとめて忠実に翻刻した。従つて、誤字と思われるものもそのままにして、(マヽ)・(カ)を付した。

一、草仮名は原則として平仮名に改めた。ただし助詞等で同字源の草仮名と片仮名については、明らかに片仮名として用いられていると判断したものは片仮名にした。

一、紙数の都合で、原本通りの行割りはしなかったので原本の丁替りは紙面の終りに当る箇所に」を付し、丁付け及び表裏を(二オ)、(二ウ)のように標示した。行替りは」を付して標示した。

一、読み易さの便をはかるため説点(。・)と並列点(・・)とを付した。

一、見せ消ちは「ヽ」と「ヾ」と「○」と「―」との四種類あつたが、その区別は特別に意味がないと判断したので「ヾ」に統一した。また、それを文字の上に施した場合と左傍に施した場合とがあるが、これも特に意味がないと判断して左傍に施して統一した。

一、本文の右傍の朱点、朱線、朱のカコミ 、朱の丸印は翻刻しなかった。

一、頭部余白に書かれた細字の注記は、項目の終りにすべて二字下げにして翻字した。

一、朱筆及び墨筆による注記は、補入も含めてすべて(朱)及び(墨)を付した。

一、原本において、正字・古体字・略体字等混用している場合には、みだりに統一することを避けて、混用のままとした。

〔大澤家聞書・翻刻〕

懷紙書様之事

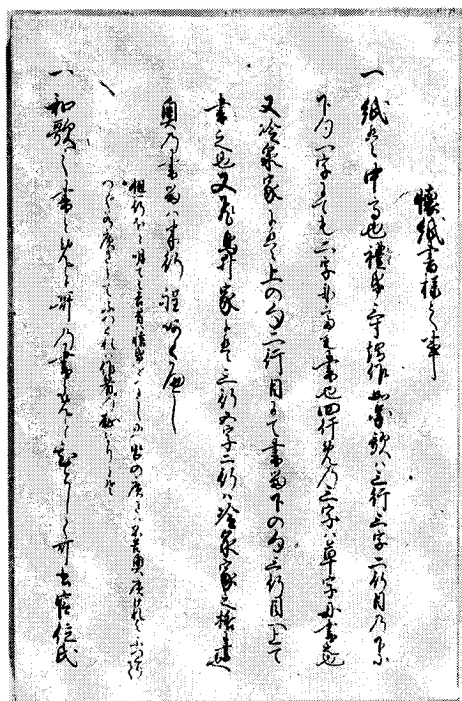
(本行聞書ハレイ)

一、紙は中高也。禮幣三寸。端作如圖。歌ハ三行三字。二行目の下に、」下句一字にても二字にても書也。四行めの三字ハ、草字に書之也。」又冷泉家には、上の句二行目にて書留、下の句三行目へ上て」書之也。又飛鳥井家には、三行五字、二行ハ冷泉家之格に書也。」奥の書留ハ、半行程あくへし。」

但、一行ほと明ても吉。昔ハ懷帑をつきしゆへ、小口の廣きハ不苦。奥廣ければ、ふつくりて」(朱)つく。若廣きとてふつくれハ、作者の恥



大澤家聞書 表紙



同 二才

御評美形。古代高統差所多。一記。

同 五才

一門也雖然聞達不少依之補之源尹祥

同 二十四才

なりとそ。」

一、和歌之書とめと、哥の書とめと、ひとしく可書。官・位・氏・
(三オ)名乗ハ、和歌の通りより一字ほと下る様に可書。同官・氏・
 名乗書出ハ、端作詠の字の通り程に可書出。併官・位・氏・名乗等
 長ハ、少しあがりても不苦。また官・位・氏・名乗等短くハ、すこ
 しさかりても不苦。又追善の懷帑には、はし作和歌^(マ)・氏性歌皆下を
 そろへ書也。下を揃へ書ことは、祝儀に^(マ)あらず。因茲消息も、した
 を揃へ書事は凶なり。追善^(マ)に經文などを題にて讀時は、五字・七
 字・長題有へし。其時ハ^(マ)和歌の字の通へ上て、二字にても三字にて
 も、句切のよき様に^(三ウ)かくへし。併一字は書切へからず。尤詠
 の字をも書之。惣而^(マ)追祝ともに長題ハ、和哥の而の通へあけて、
 二字三字句切能様に切て、可書なり。」

一、尊者、師範の列座にハ季を可書。但、其座^(マ)親なと有之^(マ)ときは、
 季をかくへし。また等輩へハ、季を不可書。貴人、主人、^(朱行問書入)主人、^(是ハ公卿)師道の
 方へハ、季をかくへし。又戀・雜・賀・無常・釋教^(朱行問書入)の類も、季
 を可書。但、無常・釋教にハ、一首にハ季可有之。^(朱行問書入)二首三首にはか
 くへからず歟。法中ハ摠て、季を不可書。^(三オ)

一、同哥の書いたし、端つくりより一首ほとのかけて可書。」

一、禁裏御會始にハ御會始と季を書なり。或は、七夕同^(マ)詠、重陽同
 詠なと、かく也。中御門には、重陽日と日の字を^(マ)かきくはへらるゝ
 也。是、彼家の面目也とそ。」

一、懷紙卷様之事。くるゝと卷、折目のつかぬ様に丸^(マ)まるとして、

上より三寸したを折かへしをく也。是ハ、文基に^(マ)いくつも載置とき、
 ころひおちぬ爲也。^(朱行問書入)冷泉家には^(マ)ひしとをり付て、一寸程折返し置
 也。二條家には、^(三ウ)ふみひしくとてきらふなり。」

一、て・に・はの文字、懷帑にてハ、上へあけて書ても不苦。」

一、同詠二字之事。禁裏御會のとき、公卿、殿上人、皆會一同しく
 詠し給により、同詠也。常の懷紙には、同詠^(朱行問書入)書へからず。飛鳥井家
 の會にハ、摠て同字不書也。^(朱行問書入)

地下にても、會合にて詠するときハ、尤可爲同詠。」

一、御製の懷紙ハ、三行々と散しに遊さるゝ也。題も季^(朱行問書入)もなし。
 自然和歌の二字有之事也。女房の懷帑、^(四オ)如此認也。則、御製
 ヲ女房之懷紙とも云。」

一、院之御製懷紙、右同斷。但、和歌の二字、又ハ端作等、遊ハさ
 るゝ事も有之。^(朱行問書入)

院之御製院中にてハ、端作和歌ノ二字遊るゝこと有之。^(朱行問書入)此說モ非也。
 時ハ、臣下と也^(マ)同前遊さるゝも如何。故女房^(マ)懷紙ニ遊さるゝ也。此追加
 基輔卿の御傳也。^(朱行問書入)

一、官女、女房の懷紙、御製と同前。官・名・季等不書なり。」料紙

ハ薄様也。三行々々散書也。又薄様を用ることハ、女房^(マ)艶書を書時、
 薄様四枚四季の絵を書、當季を上ニ^(マ)重ね、艶書を書也。夫故懷紙
 も薄様也。然共、當時ハ中高^(四ウ)を用る也。懷紙の寸法、男と同

前。^(朱行問書入)又女房の懷紙^(マ)も、自分の題ならハ、題なしに書之。

書入 組題ナラハ書也。夫モ經題ノコトキ物計也。他人の題ならは、題を「可書也。惣而、女房の懷紙ハ、卷頭に置す。題は卷頭にて」知_二よつて題を不書也。基時卿 女房の消息も、三行々々と可書也。」

（墨頭部余白書入）女房の懷紙ニ和將「二字書」事も有之。（朱頭部余白書入）非也。」無云事也。」

一、和歌之歌の字、二條家にハ歌の字、冷泉家にハ調の字、「右兩流也。然共、何の比、書傳タルト云。卒説不知。」西三条内府實隆公以前、如右書分たり。今度「御詮義あるに、古代兩流差別無之よし。記祿等_ニ」（五オ）有之。又古き懷紙に、二條家之衆に調の字書タル懷帑有之。然ル上ハ、不苦事とて、元祿元年辰七月「七夕の御會に、二條家の衆、調の字を書るゝ方、六、七」人も有之。右七夕の御會の題は、」

七夕同詠牛女年々渡和調

一、三公の懷紙には、摠て同の字なし。しかるに今度、「仙洞院宣有而御詮義あるに、攝家・清花・大臣」達、上古懷紙ニ同字有光光多し。然上ハ、同字書入不苦の」（五ウ）よし、被仰出也。」（朱御會ニ同字カ、ヌハ關白ノミ也。攝政モ同前。

一、同年御會始之題、禁庭松久、此禁之字闕字可有之」哉、否哉と、諸卿詮義有之時、基時卿曰、闕字なしに「被認可然歟。猶、彌御穿議ある所に、此例先年禁中」菊と云題の時、日野大納言円淨法皇へ禁の字欠字の」事、窺被申候處、欠字可爲無用之由、被仰出、猶、飛鳥井_{（朱行問書入）}「一位え可尋申由、院宣有之。日野大納言飛鳥井一位へ」被尋申候

所、一位被申候ハ、懷紙、短尺同例之物なれば、」（六オ）闕字無之_{（朱行問書入）}宜かへき由被申候。則、口上の留有之間、彌「基時卿の仰之通に相極めたる也。其後、禁中祝と云題」の欠字なしに被相認候也。併、清書之家へ尋も無之。」心任に欠字なしに被認候事ハ、斟酌有之事也。」

一、懷紙下の句の頭に、九重或_{（朱行問書入）}齡_{（朱行問書入）}などのやうなる文字ある」ときハ、切て不可書。冷泉家の格に、下の句三行目へ」あけて可書。其外、下の句の頭の文字により口傳餘多」有之ことなり。しかれハ、當_{（朱行問書入）}家より免なくてハかゝぬこと也。』（六ウ）御口傳曰、九重、齡に限ス、切にくき句ハ、三行目へあけて、冷泉」家の格に書也。基時卿御門弟、岡崎三位國久御會始」の懷紙、基時卿へ持參。下の句の頭、九重と云文字あり。こゝと切、のへと、三行目へあけてあり。基時卿曰、九重切」たるハ、あしく候。冷泉家の格に、三行目へあけて、可令認候。若奉行不審被申候ハ、持明院へ尋申候所ケ様ニ差圖仕」候と被申候へ。冷泉の格に、認被差出候處_{（朱行問書入）}御奉行中院_{（朱行問書入）}御覽候而、不審被申候。右、基時卿の仰の通被申候へハ、」（七オ）無何事納候也。」一、懷紙二首より九首までハ、二行七字に書也。三首の時_{（朱行問書入）}は、」札紙三寸より、せはくても不苦。三首迄ハ、料し一枚に」書也。五首、七首、九首ハ、料帑を二枚續て可書。続目の」所、三行めの下の句を、次の紙へ書越へし。」

一、同四字、五字の長き題は、下の句七文字の書とめと、「題のかきとめと、同位に書合たるか吉。名のかしらと、」下の句の七文字のかきとめと、同位に可書。草字をま」（七ウ）せてなりとも、懷紙の中程

より少さかりめに、下の句の「七文字を可書留。二字、三字など短き題ハ、不及書合。」

一、十首以上、五十首、百首にても、二行に可書。紙數も不定。」

一、女房の懷紙も、二首より九首まで書様、同前也。又三行、「二行にも可書。」

一、詩など懷紙に書時は、八・八・九・三に可書。譬ハ、

賦竹千年友なと、賦の字を可書。」

眞に詩を書時も、同重也。但、詩を眞に書事ハ、自然のこと也。」

(ハオ)

一、懷紙寸法之事。御製壹尺四寸、大臣一尺三寸、納言以下「一尺式寸、雲客一尺一寸九分、地下一尺一寸六、七分。但、懷帑」寸法極たる事ニハ非ス。天子より以下雲客マテ、段々」せはくして、用る事也。」

一、懷帑又ハ詩哥、惣而、禮紙三寸あくる事ハ、節會ノ」時、陣の座にて清書を調らるゝ事有。是、則書法」之第一也。此時、笏を料紙の端におもせに置いて、書るゝ」事也。笏のはゝ、三寸有之也。是により

礼紙三寸あくる事也。」(ハウ)

一、色紙可書事。卷頭ハ、五・五・四・と可書二首よりちらしに」(墨頭部余白書ハ基調御曰「禮紙あくること」陣座ニテ「清書調ル」ヨリ始ルト云ニモ非ス一

く也。散様段々有之ことなり。色帑一枚ニ詩を書、一枚ニ」哥をかく

時ハ、詩哥散様同事可書。如何となれハ、詩」よみかたきときハ、哥の散にて詩をよむへき故也。其外、」大きなるしきしなとに、詩哥一

所にかくときハ、」詩とうたと必、散をかへて可書。軸のものも、同

前也。又「色紙にても、軸の物にても、手跡より繪賞翫ならハ、」ゑを不可書。汚穢麁相なる絵なりとも、生類之目」(九オ)書つふすへからす。日月を書覆へからす候。又賞翫の」ゑにても、ゑの上へ書拭々つゝ、時ハぬ時は、右のことく生類之」目を除へし。又人形杯あらは、人形の目のとをり可除。」屏風左右に押す色帑は、必、散を同前に可書。散」にて詩哥一對を爲可見也。」

一、短尺書様之事。二字、三字の題ハ、一行にかくへし。」五字、七

の句の頭一字おもねりて、可書出。是れを、古哥」(九ウ)書と云。新

哥にて題・名乗をかく時は、上下の句の」頭同位にかくへし。古哥に

ても、題・名乗をかくときハ、哥の」上下の句のかしら同位に可書。

哥の書とめハ、必、かなに可書。」もしかなにかゝれぬ時ハ、字をい

かにも墨うすく可書。新」哥にても、自分のうたなとにハ、古哥の

ことく可書。」

一、同短尺哥の書出ハ、たむさくを三折にして、上の折目半字」あけてかき出スへし。しもの句、かみの句に、」一字をもねりて」可書出。

是、右に記ことく、古哥書也。勅題ならは、折目の」(十オ)したより、

かき出すへし。これハ、自然書様したる折め」きりつかむためなり。

一、女房のたむさくハ、名乗なき故、古哥のことく、下の句一字」お

もねりて、可書出。題も不書也。天子に遊るゝも、則、女房の」短尺

にあそはさるゝ也。」

一、短尺にハ、草行の字並て書事、嫌ふ也。日月の二字などハ、並ても」不苦。懷帑、軸の物等には、草行の字ならひも不苦。」

一、短尺の礼紙は、左より右を、少廣可明也。上古ハ、たむさくを」
（十ウ續し故、右の方、少廣きかよし。左、廣ければ、端をふつくる也。」若、ひろくて、端をふつくるるときハ、作者の恥也。當時は、短尺」を何枚もかさねてとつる也。」

一、とつるたむさくハ、上の一枚はかりに題をかくなり。それ」より下は、通り題也。下のとまりの短尺の裏には、」年号・月・日・何之御會と書なり。同とつる所ハ、題の上の方」を水引にてとつる也。」

一、短尺の料紙ハ、根本雲帑也。祝儀、其外には、青き方を」十二オ上へなすへし。追善・哀傷には、紫の方を上の方へなすへし。」

一、短尺名乗ハ、上の句のとまりより、名乗ハ一字さけて可書。」追善・哀傷にハ、上の句のとまりと名乗ノとまりと同位ニ」可書也。」

一、短尺哥仙書にハ、下ニ人形あらは、名乗を上可書。人形なき」には、下に名乗を可書。なかきなハ、二三行、三行ニ可書。短尺」哥仙ハ、
（朱行問書入）從是已前世尊寺のちんさん有。
むかしハ無之。中院通村公の了簡より始ル。別ニ圖有之。」

一、けかけの短尺之事。短尺の上下ニけいひき有。此書様ハ、」十二オ上のけいより上に、題を書。同けいの下より哥を書出し、」けいより下へ、一字、二字、五字にても書下ス也。名乗もけいより下ニ書之。題・哥・名乗のかつこうハ、常の短尺と同。是ハ二条流なり。冷泉」家にハ、下のけいより上ニて歌を書とめ、けいの下の真中に名乗」を書也。有圖。けかけの短尺ハ、神社奉納の短尺をつきて、」納

るなり。
（朱行問書入）か
上下揃むる爲也。前代にハ、禁裏御會ことに、用られし也。」其後、中絶。近年、後西院、今上皇帝御宇に自然用」られしよし。」（十二オ）

（墨頭部余白書入）上ノケイ引ハ「短尺三ツ折ニ」シテ上ノ「折メニケイ」ヲ引「下ノケイハ」ケイヨリ下「七分ハカリ」間ヲ置ケイ」ヲ引也。」

（朱行問書入）「一、短尺ハ、不破の關屋の板にて、人丸哥を書給ふ故に、」短尺の寸法一尺二寸、卷分八分といへ共、其説ハ惡し。古へハ、」短尺紙にてハなし。短き板ニ哥を書し也。夫故、短尺と書也。」其後、人丸、須

廣の關屋の板にて、書給によりて、一尺式寸ニ」一寸八分の紙を調し也。彼關屋の板の幅卷寸八分ニ、長一尺一式寸有之故也。又説、人丸關やの板にて書給と言も、不被」レ用。古き短尺に、みしかきも有、

長きも有。仙洞にて御會」のとき、短尺のは、御吟味有しに、古き短尺色々有之。」（十二オ）かれこれ御見合の上、は、一寸八分ニ、三リン、長さ一尺式寸」有之短尺あり。此寸法宜とて、御用有之也。」

（朱頭部余白書入）此説雖「信用」
一、哥の内、ほの、との哥、和哥の浦の哥、鴈鳴ての哥、」か様の秀脱の哥ハ、常の詩哥又ハ色紙、短尺等にも」不可書。歌仙の外ハ、可爲無用。惣而、秀脱の哥ハ不可書。」ほの、との哥ハ、神事して書事也。古今の大事も、此」一首にこもれりとそ。八雲の哥ハ不苦。」

一、哥かるたのこと。名乗も書也。此時ハ、上の句をつめて、」十三オ字まじりに散して可書。下の句ハ、かなはかりに散して」可書。哥ハ、伊勢物語、百人一首、古哥仙、又ハ、三代集の内を」書也。古今などの哥書時ハ、春・夏・秋・冬・戀・雜・賀・祝、此内」にて撰

て、百首可書也。合貝、歌かるたハ、兒、女に哥をそらん」せん爲也。かるたの形ハ、六角・圓形・龜甲・八角・將基駒形、色々」有之也。書様、大方同散（朱行問書入）又説、哥かるた散し、上下かへて可書とそ。」散にてとれは、哥を覺へさるによりて、哥にてとるやうに、」ちらしをかへて可書とそ。後日、如此御傳。」（十三ウ）

一、合貝ハ、かるたと同前。」

一、神前の哥傳之事。是を色紙形と云也。此根源は、大」嘗會行るゝ時、天子の御後ニ立る悠記、主基御屏風」の色紙形より、事おこれりとなん。此御屏風、かた／＼ハ題」はかり、かた／＼ハ哥はかり也。

丹州、江州の兩國の名所を」題にして、讀せ給ふ新哥なり。世尊寺家の能書の人、」天子の御前にて、清書し給ふこと也。」

一、哥仙色紙哥書事。人形の有色紙に書時ハ、人形の」（十四オ）通り、行のはつゝるゝ様ニ可書。此外、絵讀の物も、同前也。」左右の二字、歌より一字さけて可書。歌仙左右ならへて」書時は、名と名と對而可書。散しハ、常のことし。但、散しを」右へかくハ、不出來成物故、右散しニ書たる様ニ、左へ可散。是ハ、」ならへて押故也。常にハ、左ハ左、右ハ右はかり可書。是ハ、左ハ」左、右ハ右はかり可書也。齋宮女御ノ名ハ、左よりに可書。几帳（朱行問書入）三」搦故也。其外、長き名ハ、句切のよき様ニ、二行に可書。縦」は、」（十四ウ）

法性寺入道前關白

三條院女藏人」

太政大臣

左近」

自餘準之散形有之。」

哥は、作者の哥の内なれハ、何れの哥を書ても不苦。」

一、短尺の紙、上古ハ豎横共ニ長きよし。惣而、色紙、短尺ともニ雲紙古實也。砂子地（朱行問書入）泥繪等ハ、略義也。事欠たる時、用か心也。」

一、扇子の哥書事。扇子の地三間目より書出、奥の三間目ニ而」書納へし。上の礼紙、一寸程あくへし。骨の上に不可書。掛骨」（十五オ）骨なきところはかりに散して書也。哥ハ、古今、後撰、拾遺集、三代集の」内の戀の哥を可書候。去依所雲（朱行問書入）餘の哥をも書也。尤、法外也。或ハ一首、或ハ」二首書之。二首以上ハ、不可書。名ある人の絵

などあらハ、骨の上へ書掛て成共、繪の」よこれぬ様ニ可書。自然ハ、下の句はかりハ、骨の上へ少書掛ても、不苦。哥の散し」やう、二通り。哥の墨つき様、第三ニテつき、結句ニテつく也。」（朱、此条甚口傳アリ。

一、同扇子に書様の事。二条家ニハ骨の上にハ不書也。或説ニ、若扇子哥二枚ニ」遍く時、糊有て破るゝ故に、書かけぬと云説有。是ハ、うがちたる説也。用るにたらず。」王義之（マ、イ）か書たるにも、骨のなき所に書たり。ひろけてみる時、見安きとそ、王義之」か説を御判之上ニ而、圓淨法皇も御用遊し候。扇哥ハ、惣而所望するとも、」書さるかよし。猥に書ものにてなし。今時、扇の絵に相應之新哥など、書法外也。」

一、團扇なりのもの。眞中の通りへ懸らぬ様ニ散して可書。其内上句一字、眞中より」左へ書越へし。自然、二ツに折ても置故に、眞中に書事を除也。有圖。菱形・圓」形・ていせんなりも書様、同前也。」

一、物語書様の事。礼紙二枚除、三枚目より書へし。物語の外題ハ、

真中に可押。」

一、集の物書様ハ、礼紙二枚除、三枚目の端よりかくへし。集のものハ、外題端に押へし。」又物語の内、伊勢物語はかりハ、集書にする也。』(十五ツ)

一、屏風に打付書のこと。下の書留、揃はぬ様ニ可書。短尺、懐帋なども下を揃」書事ハ、凶事に用ることなれハ、うち付書も、同前也。」

一、経文ハ、上ノ礼紙を狭くあけ、下の禮帋ハ廣くあくへし。扱、書様ハ、初の間ハ眞」中程ハ行、終ハ草たるへし。様三卷の時ハ、初卷、終卷ハ、能書可書。中卷ハ、如何」様ニも可書。惡筆にても不苦。弘法大師などの經に、初を行草にして、奥を」眞に書たるあれ共、法ニ不立事也。』(朱 大師ノ經文、凡人ノ非所及。口傳アリ。

一、旗の文字ハ、点畫も行續も可書。書切へ續にみゆるやうに、可書。圖有。」

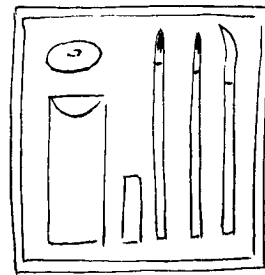
一、具足櫓之前と云字書事。前之字のへんを、月と云字ニミユルやうニ」可書。日云字ニ見ゆる様ニ、可不書。圖有。」

一、勸進帳の奥の敬白ハ、ちいさく書也。上よりの御文言、欠字、縁起も同前也。」

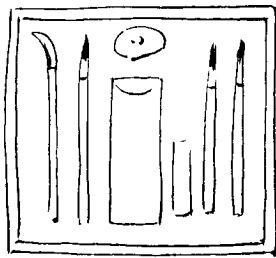
一、八景の歌讀の事。大方、歌仙の散しのことし。繪のかつこうに隨て、可書。扱、遠寺、」晚鐘なとゝ題を書に及す。哥はかり可書。それハ、題ハ絵に有故也。又」ゑを書覆ふへからず。絵とうたのちらしと、かつこうよき様ニ書合」する事、肝要也。又繪なく、詩哥はかり書には、江天暮雪なとゝ」題を可書。」

一、基時卿曰、卷頭を、高位の衆清書なさるゝハ、尤也。卷軸ヲ高位の」(十六才) 衆清書如何。』(朱 卷頭、卷軸譯アル) 也。

一、硯の内、墨・筆」・小刀置合スル」。



小刀ノ刃ヲ、此分ニムクルナリ。
カタシキタイノ時ハ、筆三管マテハ、入サル也。墨ノツカト、小刀マテナリ。



筆二管
墨一挺
筆一管
小刀一

一、何硯にても（朱行間書入）筆二官、三官には、不可過。筆の笠上の方へ不可拔。又笠ぬきかけて、物を書事有。何も不吉の事也。」硯に蓋しなから、書さぬ也。硯に水を入るに、前よりハ入さる也。」

一、墨を摺に、三説あり。の文字摺り、し文字摺り、も文字」すり也。又流人ナトノ時スルニハ、〇逆ニスル也。其外凶事ニかくのごとし。

一、入木道師弟契約之時、師のつかはるゝ筆を、所望する」（十六ウ）ものなり。これ、則、禮也。」

一、墨の薄きを可用。濃きハ、追善、哀傷に用。消息も、同前。」右筆方ニ墨のこきを祝儀と云、誤也。」（朱）口傳アリ。一概ニ薄ヲ吉事トセス。

一、色紙寸法之事。」

大色紙（朱）幅六寸四分

小色紙（朱）幅五寸二分

右之寸法、三光院御相傳也。昔ハ、是より上、稀義也。此寸法」より内ニハ、昔も小色紙とて有之みえたり。三寸六分は、」地の三十六禽。二寸八分ハ、天の二十八宿なれハ、これを合て、六寸」四分也。横を五寸六分にすることハ、天の二十八宿を一倍に」して、五寸六分にする也。當時は、是より少つゝ大きに、」（十七オ）不同にして、寸法不足と見えたり。弘安の法も、彌阿絶と」みえたり。」

一、短尺寸法之事。

幅一寸八分。長一尺壹寸五分。（朱）短尺也。

御製を平人之書ハ、」

幅一寸九分。自然一寸八分ニモ、」

長一尺六分。同一分も短く、」

御製 震筆之時ハ、」

幅二寸。長一尺壹寸八分之内也。」

三光院之説也。」

一、短尺書様之事。」（十七ウ）

於武家題無之時ハ、短尺之長三ツニ折テ、三折之上に」一字上て筆を立る。書留ハ、下七分上て書留。下の留ハ、」（朱行間書入此説相違）一字下て筆をも名・題有之ハ書留。上ノ句の書留より、」一字上にて書留て、実名也。

但、實名無之時ハ、上の句」のとめ、しもの句同前也。」

一、一字題は、短尺之上端、題の文字の長程、（朱行間書入之）おいて書。」三折の上、一字懸て書之。書留、右におなし。下の句も上ノ句も、」同通、

可書。下句の留、右に用。」

一、二字題、右同前。」

一、三、四字題書時は、短尺の端三分程置て、題を書、三ツ目」を折（朱行間書入此説相違）之下、三分下て哥を書出也。下の留、実名無之」時ハ、上、下の句四分上て書留也。但、実名有之ハ、その心得、」（十八オ）下の句計上如右留なり。」

一、古題有之を當分ニ至て、題を除可書時は、三、四字題」成共、一字題のことく、上の句、下の句同通より可書由」なり。上、下の句、

書留一寸五分上にて。」

一、たむさくの長短々々ハ、題をも除なり。略すること不」好事なり。しもの句一字上にて留也。」

一、短尺、色帛など、内雲などに絵書、下ゑを書違て、紫「色上になすこと有之。如何ほとゑ逆三成とも、青きかた」上になして書なり。但、左様之下絵、相違の紙ハ、斟酌有し事也。」

一、短冊、色帛の外に、哥を一首所望にても、又常に書候「つゝ、二行七字三可有之。」(十八ウ)

一、扇に所望にて哥をかく事。堅斟酌可有之。達而所望に候ハ、骨の上、絵の上に不可書。扇の裏一間の内に、上、下の句共三可書。卑下したる書様也。打散てハ、狼藉なり。」

一、歌書、我本にあらすして書寫。上紙に其哥書の名を「書付事、斟酌可有候。但、表帛ヨリ内にて候ハ、不及是」非外題ハ定家卿も斟酌のよしなり。」

一、色紙寸法之事。」

大紙帛ハ 竪六寸四分、
幅五寸六分。

小紙帛 竪六寸、
幅五寸一分。

右之寸法、三光院御相傳也。昔は、是より上稀な「流義也。此寸法、内ニハ、むかしも小紙とて有之こと見へたり。」(十九オ) 三寸六分ハ地の三十六禽、二寸八分ハ天の二十八宿なれば、是を「合六寸四分也。横を五寸六分ニすること、天の二十八宿一倍ニして」五寸六分する也。當時ハ、是より少ハ、大きに不同に「して、寸法不是とみえたり。弘安の法も、彌斷絶と」見えたり。」

(墨頭部余白書入此一条「重出力。」(朱頭部余白書入色帛「色帛夜鶴抄」くハし「のぶ」依之相違ハ其まゝをく。)

一、かなづかい近道の事。

中のえを書事。ゆえの讀、皆中のえを書也。」

こえ・こゆる・越・きえ・きゆる・消・聞・絶・寒・覺・萌・燃・肥・愈、

一、ほのをと読かなの事。大略、文字の内、中、下に読ハ、ほの「字を書て、おとよむなり。」(十九ウ)

塩・庵・顔・薰・匂・竿・掩・巖・潤・樅・焰・郡・氷

此類、皆ほなるへし。」

一、端のを、書事。小の字の類、皆端のを也。」

小舟・小川・小塩山・小嶋・小倉山・小野・小鹿・小山田・小笠原・小忌衣・小櫛玉・小柳・小車・賤小玉卷」

此類、端のをなり。」

一、奥のおの事。大の字、何れも奥のお也。」

大空・大方・大原山・大淀・大江山・大井川・大海・大臣」

此類、何れも奥のおなるへし。」

一、端のへを書事。ふ・ひ・へ、此三ツニ通せハ、何れも端へを可「書。おもふ・おもへ・酬・言・番・迷・類、筑前園田殿にて、」(二十オ) 或人、

雷にけさそたくひなし峯の松」

洗はふ・ひ・へ、葛・類・樂・漂・擔・語・荷・祝・僻・言・唱・添・誘・引・逢・通・叶・伴・謠・問・訪・やすらふ・水餉・賣・買・挑・狂・順・拾・慕・弔・伺・向・醉・きろう・ひ・へ、

味・戰・隨・移・古・舞・養・習・^(カ)抒・^(カ)競・喰・厭・巾、いさのふ・ひ・へ、かけろふ・ひ・へ、つくろふ・ひ・へ・^(朱行間書入)からふ・ひ・へ」ねらふ・ひ・へ、もよふ・ひ・へ、

此外、ふ・ひ・への事。中のえの字除を有。辨・備・榮・調・賑・^(カ)拵・衰・横・^(カ)教、^(朱行間書入)ふまへ・ふまふる・ま・へ・ま・ふる、

此外、しるし落たる事。數多可有如此。は・ひ・ふ・へ・ほに通する「五音の故に、端のへを書こと、此類わすれても、此類よまむ」二十ウ かなに中のえ、又奥のゑなと書ましき也。」

一、中のゐを書事。下のひゞきあまたに通せず。唯、一通に「よめハ、中のゐなるへし。くれなる・くれなふとも、くれ」なへとも、よまさるによつて、中のゐをかくへし。位・魂・初冠・空・居、^(朱行間書入)謠・圓・居・霄・垂氷・雜・新枕・木居・鶯之・新年、

この類、いなるへし。」

聲・末・焚・右ゑもん・左ゑもん・いゑ・うへもん・さへもんにてハあるへからず。」

一、端のいを下にかく事。聲餘多讀さる故に、端の「いをかくなるへし。老寢覺・ひたい・^(朱行間書入)禮拜・^(朱行間書入)胎戒・^(朱行間書入)塩」二十一オ 間見・續松・内々・細々、このるい、はしのいをしたに書也。」大畧、音に読字、下をいとよめるハ、端のいなるへし。訓をハ」ひの字をかく也。縦ハうくひすとハ、訓の讀なり。これは「わうの音なり。このるい、數多有。」

一、うの字をしたに書事。ひゞき餘多不讀は、うの字なり。」^(朱行間書入)僧・法師・燒香・女房・^(朱行間書入)内道・少將・堂塔・供・興隆・料紙、^(朱行間書入)此類も、音こころむの時、下をうとよむ。大略、うのかななるへし。訓ニよむ時は、下をうと書は、ふの字書なり。但、^(朱行間書入)牀に「よるへし。」

一、むの字をうの音によむハ、口を結て読字ハ、むの字をうの音に讀なるへし。」^(朱行間書入)二十一ウ

むもれ木・梅・^(朱行間書入)むは玉・うえ・むま場

一、物の緒といふ字、何れも端のを、かく。」

玉緒・琵琶・琴・甲緒・箱緒・^(朱行間書入)鶯ノ緒・沓緒

一、尾上・鸞の尾・山鳥のおのしたりおの・馬のおかみ、此類、「何も生類の尾、おくのお也。」^(朱行間書入)おしなへてをし明かた」をしはかるをさへてむせふ舟ををす」

この類、わすれても、おくのおにてなし。」

^(朱行間書入)もの少音・をとつれ・かねのをと・風のをと・音無川・^(朱行間書入)音羽川・^(朱行間書入)松の沓音・^(朱行間書入)大鼓のこゑ、

一、はせをは、はせうとハ不書。はせをと書をはりて、^(朱行間書入)古今の物の名不の哥に、

いさゝめにときまつまにてひハへぬる」こゝろはせをは人

此哥ハ篠・松・枇杷・芭蕉、この四ツを立入て、よみ」たる歌な

り。」

ふりはへていさふる里の花みんと」(朱行間書入)うしをにほひようつろ(朱行間書入)ひにけり」

一、りうたんの花と書り。りんたうと不書。」

我宿のはなみちらすりうたんの」野ハなければやこゝにし(朱行間書入)もくる」(三十二ウ)

一、けにこしと書り。けんこしとハ不書。此故に、」

うちつけにこしとやはな(朱行間書入)の花みむと」をくしら露のそむるはかりを」

一、をみなへしとハ、端のをなり。」

女郎花と書り。をんなとハ、端のをなり。をみなへし」(朱行間書入)をうち入たる哥に、」

しら露を玉にぬくとやさゝかにの」花にも葉にもいとをみなへし」

おとことハ、おくのお也。(墨行間書入)又をのとの時ハ、端のをなり。(朱行間書入)近頃

の口傳のかなおほし。かなにかく字(墨)、わろきあ」(朱)れは、端のいや奥

のひや、中のおやなど、思の外ニ、かけるも有。」(朱行間書入)二二三オ」なかのえハ、ゆえとゆく所を心か(朱行間書入)類。右にしるせるより外ニ、中のえは、

ふ・ひ・へと通する故に、端のへをかくに(朱行間書入)類字」多し。しろたへ・たへかねてなと妙の字、堪の字とハ、ふ・ひ」・へとかよハされ

とも、端のへをかくなり。(朱行間書入)かゑるなとゝ書る」ハ、ふひへとはゆかさる字なり。されとも、かへるとかなにて」書付時ハ、中のえ、おく

のゑ、似合さるる端のへを、かへる」と、かくなり。」

此類、他ニ准へし。」

一、己・自・おのかさま(朱行間書入)・おのく、此類、忘れても、奥のお」

えは、有間敷なり。おほしめし・おはしましなとハ、奥」のおなるへし。おはしましなと、端のを(朱行間書入)書人之」(二十三ウ)あやまりにや。又

御の字は、いつれもおく」のおなり。」

(朱奥書)此一巻、大澤家ノ聞書也。大澤ハ持明院家ノ」一門也。雖然、聞違不少、依之補之。源尹祥。」(二十四オ)

(本学助教・書道史)